

「どこかの国の大統領が言っていた刀声を上げない者たちは賛成している」と、この詩は、櫻坂46のヒット曲「サイレントマジョリティー」の一節だ。

香港の政治家、周庭(アグネス・チョウ)氏は、この曲にとっても勇気づけられた、という。

2014年、「雨傘運動」と言われた香港の民主化要求デモを支え、政党「香港衆志」の創設メンバーとして勇敢に戦ってきた彼女は当時17歳、櫻坂のメンバーでも不思議ではない普通の女の子だ。

21歳になった彼女は、この春実施される香港立法会(議会)補欠選挙に、立候補するべく名乗りを上げたが、「民主自決」という主張が「香港は中国の不可分の一部」という法律に触れるという理由で、立候補資格をなく奪われた。

彼女の政治活動には、盗聴、尾行は日常茶飯事、脅迫や嫌がらせも稀ではない。ある意味、自身の将来も捨て、そんな怖い思いをしてまで声を上げる理由はなんだろうか?心の底から「民主自決の自由」を守りたいからに違いない。

日本でも人権や自由を要求する政治活動やデモはあるが、甘えた輩の自分探しであることが多く、安全な場所、モラトリアムのように社会運動するのは、流行り病のような覚悟でしかない。

政治の世界も、自分が一番大事!という人ばかりが目立っている。

日本にも、かつては命を賭けて政治活動をする人がいた。そして、その偉大な先人たちのおかげで、自由と平和に恵まれてい

『サイレントマジョリティー』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

る。

しかし、あまりに恵まれすぎて、自由や人権の有難味をはき違え、何より「平和を守る」ことについて、受け身が過ぎる。

「安全の有難さ」も「平穩の価値」も、自分たちが死に物狂いで築きあげた、という自負がないから、感謝の気持ちすら希薄なのだ。

軍隊を持つことに世界一負い目?を感じながら、一方では世界一の軍隊を持つ国を讃え、支えている。こんな論理的矛盾があるだろうか?

今の平和は21世紀も懲りずに戦争を続ける好戦的な国のおかげ様なのか?

国連が公正に平和を与えてくれるわけでも、必ず正義を実現してくれるわけでもないことを、皆知っているながら、見て見ぬふりをしていく。

正義と公正は、あくまで理想神話に過ぎず、実際には5大国が拒否権を発動した瞬間に、国際社会の思考停止が始まってしまふ。見方を変えれば、国連こそ、理想を貪るサイレントマジョリティーではないか?本当の危機には、誰も助けてはくれない:21世紀、その現実を生映像で見られるようになった。

自分で声を上げ、自分で戦って乗り越えていく準備と覚悟が必要なのだ。

「民主自決」は、国民の戦いと努力の継続により実現される。

あなたは、自由を守るために、自己を犠牲にする覚悟はありますか?



Profile

安全保障・教育評論家/1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
「雲涯蒼天」
定価700円
Amazonにて販売中